

親しくしている知人が最近、末期の直腸がんと診断されました。最近では日本人の半分は人生の間にかんになり、死亡原因の3分の1を占める疾患ですが、身近に起きてみて初めてその重大さを改めて考えることとなります。

がん遺伝子が人間の生体防衛システムの中での暴走を始めるのが悪性腫瘍(がん)と考えます。健診を定期的に受けることでの早期発見と、自覚症状があるときの医療機関への受診の大切さを再度実感しましたが、知人は多忙を理由に検査を怠った面もあり彼の過労が生体防御に良かったと言えません。しかし診断確定後、がんとできるだけ共存することを目指した彼は仕事をほぼ休止、治療に専念、様々な専門家の意見を聞いてさらに精神的にも肉体的にも受けられるサポートをすべて受けて治療を行っています。

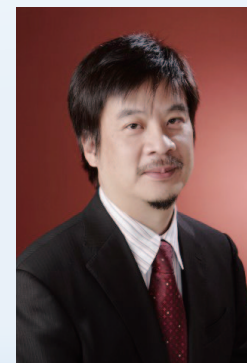
自分に利益になるものを身の回りに置き自分に利益のないものを遠ざける。抗がん剤治療にたえる体力を維持する、適切なアドバイスを人生の先輩方に

求める。その彼が受けたアドバイスの中で“治療を適切に受けて環境を整えられたら病気(がん)が良くなると思わないように。良くなるのではなくてがんはもう治ったと思うのです”と言われたとの事です。あまりに楽天的と思われそうですが、適切な医療を受け心身の平安が得られたときに“病気がもう治った、よかった、ありがとう”と思う気持ちになることは大変意義のあることです。また、彼は様々な人から将来の目標となるイベントを設定してもらいそれを一緒に楽しむことを約束しています。私も彼が病気を克服して治った状態で5年後に一緒に旅行に行こう、と話をしています。

がんなどの医療情報が少ないとよく問題にされますが、最近ではインターネットなどの環境で適切な医療情報を得ることができます。山梨県でも県立中央病院のがんセンター機能、山梨大学をはじめとする基幹病院の先生方の努力で情報は豊富にあります。ただ、適切な情報を得るためにはまずいつも受診している医師など医療の専門家(がん専門の必要はあ

りません)の意見を聞いてください。医師は専門外でもどのようにすれば適切な情報を得ることができるか知っております。

病気は患者さんごとに対応がまったく変わってくるものです。がんにしても私が診療する関節リウマチも闘病意欲と適切な医療を受ける環境をもとめ病気がよくなるを考えるのではなくて、病気が治った良くなった、ありがとうと思う精神状態で治療を受けていきたいですね。



にしおか内科  
クリニックRA 院長  
西岡 雄一

専門分野は関節リウマチ、痛風、気管支喘息、漢方薬治療。地元のファミリードクターとして、一般内科も診察。ラジオドクターとしても活躍中。